

横井也有（四）

伊藤浩睦

前回、書きましたように、横井也有には、同時代に生きた人で俳諧の師匠と呼べる人はいません。また、弟子の立場にあった人もいません。隠居所に遊びに来る仲間がいただけで、それは俳諧には限らず、茶の湯や謡曲や、古典文学を楽しむ仲間でした。

職業俳人であれば、自分が売り出すために師匠を偉大な存在であると喧伝するとか、弟子を上手く集めて組織化するとかいった作業が必要になりますが、そのようなこととは無縁の俳人でした。だから、世間の流行に背を向けて、自分が楽しいと思える滑稽を俳諧や俳文で追及することができたのです。

「史記の滑稽伝に猶俳諧といふより、俳諧をいひかへて滑稽共いふ。好事の癖也。巧言利口には似たれ共、これは只俳諧之連歌といふことを心に忘れずして此道に遊ぶべし。蕉翁は正風の祖也。つゐに世辺の事において一事の人を教へ一言の君を諫し事を聞かず。風諫の俳諧にあらず風雅の俳諧なれば也」

「俳諧に何の日用の徳かあるべき、天下を利する論ならば磨の目切にも及ぶべからず」

いずれも『管見草』の中で述べている也有の俳諧論ですが、大仰に史記まで持ち出して、俳諧は滑稽だと言い俳諧之連歌であることを忘れずに遊ぶべしとして、滑稽であることの念押しをやっています。松尾芭蕉に関しては、正風の祖と言いつつも、滑稽である俳諧とは別といった扱いにしている、正風が俳諧であるかどうか微妙といった感じもあります。俳諧で人を教えたことも主君を諫めたことも聞かない、それは俳諧が風雅であるからだとしています。

二つ目の文章では、露骨に俳諧は日用の徳にはならない、天下を論ずるのであれば磨（うすと読ませています）の目切にも及ばないとして、徹底して役に立たないものであるとしています。

現在でも、俳句は季節の移り変わりに心を動かすから情操教育に役立つとか、高齢者の呆け防止になるとかいった効能を説く人がいます。それを商売にしようと思えば効能書きの一つも俳句にぶら下げなければならないわけですが、俳諧は滑稽で世の役には立たない楽しみごとと断じていた也有は、俳諧の効能は全て排除しています。

江戸時代の俳諧俳文の出版は、自身が俳諧師として売り出すために行なうか、弟子たちが自分が俳諧師になる手段として師匠の偉大さを喧伝するために行なうかでしたから、弟子のいない也有の俳諧や俳文は世に埋もれていました。偶然に「奈良団賛」を目にした太田南畝がその面白さに驚き、これを書いた人に会いたいと探し廻り、既に亡くなっていると知った後、捜し出してその著作物を出版したことで世に出たのです。

俳人としては孤高の人であり、当時の俳諧にも後世の俳句にも、何一つ影響を及ぼさなかった存在ですが、分かる人にはその発句や俳文の面白さが分かる存在でもあります。

名古屋市営の東山動植物園には、也有苑があり、也有が詠んだ俳句五十句とそれにちなんだ植物が展示されています。東山動植物園を訪れた際には、也有苑まで足を延ばしていただきたいです。